## 第3章

## 大間知篤三――民族学と民俗学

月博多に引き揚げるまで、七年余り満洲で生活していた。 の満洲建国大学(以下、「建国大学」と記す)赴任は既に決まっていた。二月に大間知は満洲に渡り、 一九三九年一月、太田陸郎の中国民俗に関する最初の文章が『旅と伝説』の読者の目にふれたとき、大間知篤三 一九四六年八

ことで、早くから注目されてきた。 子、建国大学の助教授、教授という経歴に加えて、晩年独自な調査研究法を確立し、師・柳田への批判を展開した 要な業績を残した人物である。東京帝国大学新人会(以下、「新人会」と記す)の幹事長、共産党員、 大間知篤三は日本の民俗学、なかんずく婚姻、家族など、後に社会伝承と称されるようになった分野において重 柳田国男の弟

学と東大新人会―大間知篤三を中心に―」(『史林』七七-四、一九九四年七月)、満洲での活動については竹田旦「解 民俗学のエッセンス』一九七九年)、新人会での活動や柳田の門弟としての異色ぶりについては鶴見太郎「 大間知の民俗学研究の特色については上野和男「大間知篤三――その研究と方法」(瀬川清子・植松明石編 柳田 『日本

全六巻が未来社より刊行され、その第六巻には満洲に関する大間知の文章、そして妻・千代と竹田旦による大間知 説」(『大間知篤三著作集六』一九八二年)などの先行研究がある。一九七五年~一九八二年、『大間知篤三著作集』

念特集」(以下、「追悼特集」と記す)であり、関係者による回想には重要な情報が数多く含まれている。 の略年譜と著作目録が収められている。なお『民間伝承』三四-二(一九七〇年七月)は「大間知篤三先生追悼記

な活動や研究を明らかにし、その中国経験の意味を検討する。 本章では以上の先行研究と基礎資料を参考にしながら、大間知の民俗学創立期での活躍、及び満洲赴任後の活発

## 1 新人会から民俗学へ

## ・ 大間知篤三(おおまち・とくぞう)の略歴

- 九〇〇年、富山県富山市の裕福な呉服屋の次男として生まれる。父親は富山銀行頭取。
- 九二四年、新人会に入会、文学創作活動も続ける。翌年より運動に専念する。 九二三年四月、金沢の第四高等学校を卒業し、東京帝国大学文学部独文学科に入学する。
- 九二六年、一年卒業を延ばして新人会幹事長となり、学連の指導にも当たる。労働農民党本部で書記を勤め、 上司浅野晃の指令で日本共産党に入党する。
- 九二七年末、一年志願兵として金沢歩兵第七連隊に入営する。翌年、三・一五事件で検挙され、三年間 を言い渡される。 この実刑
- 九三一年、出所して新人会の友人であった大宅壮一の翻訳団に参加する。 る。 ドイツ小説の翻訳を出版し、 結婚す
- 九三三年、 民間伝承論講義に参加し、 柳田の指示で婚姻習俗語彙の編纂を始める。